

釈直道

新
我が
闘
争



目次

1) 私の思想形成過程	3
2) 学生時代の運動	5
3) 医師時代の闘争	8
謝辞	10

1
）私
の
思
想
形
成
過
程

私は1948年三重県で生まれた。父は国家公務員で今でいえばやり手の人であった。専門学校の出身で営林署に勤務し末にはK見で営林局長まで出世した。大学を卒業せずに局長になった人は非常に珍しいらしい。

父は太平洋戦争の時代木炭事務所の所長をしていて、戦争に必須の生産部門にいた為に徴兵されなかったらしい。父は財テクにもたけていて株取引や不動産取引等を行った結果かなりの遺産を残した。父は定年後不動産業に携わろうとして50歳を超えてからいわゆる宅建免許を取っていた。また父は多才な人で囲碁、将棋、麻雀、トランプ（ナポレオン、ツーンテンジャック）などを家族にも教えて父が暇なとき家族全員で楽しんだ。

母は愛知県で生まれ地元の女学校を首席で卒業した。父はその点を極めて重視して結婚したらしい。晩年母は経済的自立を目指して鍼灸学校へ入学し見事に首席で卒業した。母は社会的な問題にも強い関心を持ち、家永三郎教授の起こした教科書検定裁判を強く支援し、また婦人民主クラブ（非共産党）の手伝いをしていた。無理がたたったのか鬱病になった。そんな母も突然の病には勝てず57歳で亡くなった。（腹膜癌だった。亡くなった後病理解剖もしたが原発巣は不明だった）

私はひ弱い子で始終自家中毒（嘔吐を数日或は数週間繰り返す病氣）を頻回に繰り返し父や母は本当に心配したらしい。父の転勤でS賀市からF山市に移動してからはピタッと発症しなくなった。今でも原因は分からない。ただ今でも覚えているのは発作？ の時に受けた大量の皮下注射の痛みである。当時は静脈注射（静脈点滴）はまだ一般的にはなっていなかったものであろうか？ 今でも不思議に思う。

さて私がいわゆる思想といわれる物に接したのは1960年頃である。その年岸内閣はアメリカと日米安保条約を締結しようとしていた。丁度その頃私の姉は大学1年生でその反対運動に参加していた。当時はまだ大学自治会も健在でそれこそ万単位の学生がデモンストレーションに参加して労働者と共闘していた。その姉から私はマルクスレーニン主義の概要や基本的理念やロシア革命の内実等々を教わった。母は娘の思考や行動を理解していたが父はカンカンであった。

今時はマルクスレーニン主義など口にする人等ほとんどないし日本共産党を除いてそれを標榜する政党も殆ど見当たらない。唯一社会民主党ぐらいその系統を継いでいるのかもしれない。

2) 学生時代の運動

私は1970年OS大学医学部に入学した。この時は日米安保条約の改訂時期に当たり、またベトナム戦争反対運動もアメリカ全土に拡がり日本にも波及し、当時は世間も少し騒然としていた。

私の入学したOS大学でも各諸勢力が各会派に分かれてしを削っていた。自治会の執行部の過半数を握っていたのは民学同（民主主義学生同盟、アメリカとソ連の核拡散条約を巡って日本共産党を除名された志賀義男氏の流れをくむ学生組織）そして直接選挙で選ばれた委員長、書記長の2人は民主青年同盟（通称民青、日本共産党の下部組織）と少し変則的な状態にあった。また所謂過激派（赤軍派、革マル派、社青同）なども少数ながら存在していた。

当時の通常の意味決定機関は各クラスから選ばれた自治委員（当時の医学部1年1組からは3名）と執行委員が参加する自治委員会であった。自治委員会は医学部、薬学部、理学部、文学部、法学部などの全学部の自治委員から構成されていた。さらにその上の意思決定機関としては全学総会があった。私はI君と共に自治委員に立候補した。しかし意外な事に過激派の親派だったS君も立候補し、他には立候補者がいなかったこの3人がM-1組の自治委員となった。

この頃は学内では、ヘルメットを被りゲバ棒を持った過激派が公然と暴力を振るい、私も彼らの主張には絶対的に反対していたために2回ほど殴られた。S君は彼らと同じ行動をとっていた。しかしある時にクラスの話し合いの中である女子学生がS君の暴力行為を公然と批判した。S君は頭を垂れて一言も言い訳出来なかった。

そうこうしているうちに事件がおきた。過激派が各学部の自治委員を勝手に招集し独自に自治委員会を開催し、全学部の自治委員の半数以上で自治委員会が成立したとして新たに新執行部を選出したのである。これにより二組の執行委員会ができる事となった。彼等は新しい権力？ 構造の確立と前自治会が徴収した自治会費の略奪を意図していた。ここで自治会は分裂崩壊したのである。

しかしながらS君はクラスでの討論、合意なくこの自治委員会に参加してM1の代表として行動したのである。彼はクラスの討論会で強く批判されたが一言も反論しなかった。彼には最早クラス内の多数派形成や民主主義の遂行などを目指すことは眼中に無かったようだ。

ある日過激派がIT空港に突入するため前日にOS大学に泊まりこむと情報が入った。俄然校内に緊張が走った。その頃全国の大学で過激派がストライキをしたり大学を占拠したりして、そのために彼等を排除するために大学当局による機動隊の導入が頻発していた。

そして午後9時頃はたして情報通り約50ほど人数が学内に突入？ してきた。しかしながら構内には200300人が参集していた。彼らはデモ隊に対して「帰れ、帰れ」のシュプレヒコールを繰り返していた。やがてさるビルのバルコニーに大学総長が現れ学生との対話に臨んだ。そのなかで総長は、今の時点で機動隊の導入は要請しないと確約した。それで我々は三々五々と解散し家路に着いた。（因みに

IT空港は当時アメリカ軍がベトナム戦争の基地として使用していた。）

しかしながら翌日過激派のデモ隊が出発した時には、驚いたことにはその数は200300人に膨れ上がっていた。今になって思うに、やはりそのころは不平と不満の時代であったのであろう。

その後一進一退の状況が続いていたが、ある日民学同系の旧執行部が全学総会を召集した。自治委員会も開けず、執行委員会も分裂崩壊していたので、全学総会で自治会の立て直しと、今後の運動方針を決定したかったのではないかと思われる。しかし何の根回しや下準備もなく、ただ単に集まって学生に意思決定を任せるのは極めて危険であると私には思われた。

全学総会の当日会場は平素なら100人位しか入らない大講堂が学生で溢れかえって、会場の外まで多くの学生がいた。旧執行部が会議を始めると突然過激派学生が「全学無期限ストライキ」を提案しその場にいた圧倒的多数が賛成した。ストライキの目的や何処と何の交渉の話し合いをするかなど全く討議する事もなく過激派が集まっていた学生はさっさと解散してしまった。これは日本中の大学で流行していた同一のパターンであり、また民学同執行部の失敗であった。過激派は各校舎を封鎖し各教授たちも身の危険を感じて登校しなくなった。

私達は同級生の緊急連絡網を作り、月に1回位クラスで話し合いを行っていた。この時に僅かに運動を行っていたのは6学部大学院生から構成された院生協議会であった。院生協議会は独自の課題、自らの待遇改善や人事の透明化等を求めて大学側と団体交渉を行っており、我々もそこに参加していった。しかし私も週に2ないし3回は登校したが、ストライキ中の学内は閑散としており、何もなすすべは無かった。私は月に1度ぐらいに「ベトナムに平和を市民連合」のデモに参加したり、総評の集会に行ったりしていた。

やがてストライキは年を超えて、国内の過激派（一般には全共闘と称されたが）の闘争は益々先鋭化していった。その矛先は時の政府に向けられ、東京大学安田記念講堂での立てこもり事件、あさま山荘事件などが起こった。これ等の事件は最早学生運動とは言えず、大衆や労働者の意識や感覚から遙かに遊離した物であった。因みに東京大学の入学試験が中止になったのもこの年である。

私たちの大学でも定期試験が中止され、下手をすると全員留年になる恐れが出てきた。長期間の惰性或、過激派の失踪、等を巧みに利用し組織化したのが共産党系の民青の諸君であった。彼等は大学当局と手を結び、更に体育会系の学生を巻き込んでDN之島講堂で全学集会を開いた。機動隊と体育会系の学生に守られて数百人の学生が参加して採決が行われて、漸くストライキは解除された。

結局我々は何も得る物は無かった。ただクラス内の友情と信頼関係は大きな財産としてその後が続いていった。中でもKA君はその人柄の良さで人望を集め、後に49青年医師連合の立上げの時には、その代表となってくれた。またKOさんは、陰日なたなく私を助けてくれた。昭和45年我々は医学部専門課程に進んだ。

3 ） 医師時代の闘争

昭和49年(1974年)私は医師国家試験を経て医師となった。この時点で我々は先輩医師達が達成してくれた道を歩むことになる。一般に医師は高所得と思われるがちであるが決してそうではない。1960年までインターン制度の名目で卒業2年間は全く無報酬で大学病院で勤務させられ、その後は医局の指示のまま決められた指定された病院に送られた。1960年東京大学医学部のインターンや学生達が立ち上がりインターン制度は廃止された。OS大学では更に運動が続けられ青年医師連合(略称青医連)が結成され、非入局ローテイト、就職先の自主決定などが医学部教授会と合意されていた。従来は卒業するとすぐに医局に入り、その医局の指示で派遣病院に就職していたのとは大違いであった。私達も49青医連を立ち上げ、ほぼ90%の参加率を得た。

私は1年目を循環器内科と内分泌内科で研修し、2年目は放射線科で教育を受けた。当時X線CTなどの画像診断技術が飛躍的に向上した時代でこの私の経験は後日私の仕事に非常に役立つ事になった。昭和52年私はN市立中央病院に就職した。内科と放射線科の兼任となった。私は内科医師として外来診療及び病棟診療を行うと共にX線による胃造影検査、血管造影検査などを行った。月に1度は夜間救急外来の当直があり睡眠が下手な私は翌日の勤務はかなり辛かった。しかし今の勤務医はもっと劣悪な労働条件に置かれている。

ある日内科部長であったK先生が近づいて来てある書類をそっと見せてくれた。それは自治体病院協議会が纏めた全国の自治体病院の医師給与の一覧表であった。驚いた事に私の勤めていたN市立中央病院は最低ランクであった。(K先生は私がこの事実を知れば私や他の医師がどう動くか大体予想していただろう。)

私は即座に医局会を開催し病院当局およびN市に賃上げの要望書を提出した。同時に要望が認められないならば全ての外来診療科でストライキを行う事とした。(我々の勤めていた病院では看護職や検査技師などが時にストライキを行っていた。)

因みに私の大学勤務の時は、給与は月10万ほど、N市立中央病院では手取りで20万円くらいであった。此の頃の平均賃金がいくらであったかは私は知らない。さらに言うとな私の娘は大学病院で週1回外来診療をしているが、時給は800円程度という。最終的にはある金額で妥結した。

そうこうしているうちに青医連運動が衰退し医局講座制が復権してきた。当時の内科部長はK先生であったが、S病院長はK内科部長の上にH副院長を任命した。K先生は比較的穏やかで民主的な人で内科の運営をみんなで話し合っ進めていた。

H先生は完全にかつ典型的な医局人間であった。命令一下すべての部下が自分に従うものと固く信じていた。また新規の医師の採用は非常勤として人件費を抑えようとしていた。更に自分の連れてきた非

常勤医師を仕事の面で優遇した。N市及びS病院長更に大学医局ががちりと手を結びN市立中央病院を再編しようとしていた。標的はK内科部長とその廻りを取り巻く内科医師達であった。様々な嫌がらせ、圧力があつた。

S病院長は我々を称して、ねぐらを持たない野良犬と呼んだ。ここに来て猛然と立ちあがったのがN山先生であつた。

彼は内科中で最も勉強熱心でかつ博学であつた。しかしそれをひけらかすことも無かつた。また極めて優しく包容力があり患者さん、同僚、他職種からも圧倒的な信頼と敬愛を集めていた。彼は公然とH副院長に盾をつき、その非民主的なやり方をはつきりと批判した。しかし私たちは彼の闘争を励ましたり、支えたり出来なかつた。その頃には大学に於いても青年医師連合運動も崩壊していたからである。

大学に於ける医局講座制の強化、病院の権力支配に抗う事は不可能であつた。彼が退職を決めた時は、慌ててS病院長が慰留にやって来た。彼の實力評判等を病院当局も十分知っていたのである。彼は「H副院長は民主的でない」と答えたそうである。病院長にはおよそ理解不能であつたろう。

彼はK内科部長の配転と一緒に、N市立中央病院を退職し某民間病院に就職した。(その後従来勤務した内科医師が次々と退職した。私はどうしようもない痼疾こしじがあつた為にN市立中央病院で勤務を続けた。H副院長より再三再四入局を迫られたがそれだけは拒否した。)そこでも彼は医療現場の厳しさに直面する。

今でもそうであるが、民間の私立の医療機関は経済第一主義であり、本来であれば必要のない検査や治療をどんどん行っている。N山先生の検査の指示に院長が勝手に項目を追加したり、処方を変更したりしたらしい。1年をまたず彼はその病院を退職した。暫く充電しほちの後彼はN市NH町に医院を開業した。この付近は電車の駅もなく、バス停もなく、大きなマンションもなく、処方箋薬局もなく、開業には全く不向きであつた。それまで数人が開業したが全て失敗していた。我々関係者も強く心配していたが、彼は立派に成功した。のみならず彼はN市医師会で再教育担当を担いN市医師会で複数の研究会を立ち上げそれらを日常的継続的なものとした。

私も彼からの依頼で画像診断研究会を月に1度行つた。他の人に教えるためには自分も勉強しなければならず、私も非常に刺激になつた。余談であるが彼は絵画の才能がありその方面でも高く評価されている。何回も個展を開いたり、また色々な作品展で表彰も受けている。

また彼は進取の才能があり、ファイルメーカープロというリレーショナルデータベースを使い独自の電子カルテを創り上げた。(ファイルメーカーはデータベース型ソフト。リレーションという機能を使うと複数のデータを瞬時に一画面に表示出来る。)

残念ながらファイルメーカーには計算機能が無いので診療報酬の計算やレセプト作成は出来ない。市販の電子カルテシステムは極めて高価でレセコン機能を保持するには薬価改訂時期等これまた多額の費用が掛かる。またその操作性は極めて煩雑でN市立中央病院では医師の診察室に電子カルテ運用にその為だけに専門の職員を一人配置している始末である。

謝辞

ご覧下さりありがとうございました。

この続き、「地域住民運動」「裁判闘争」「病との闘い」章は有料版か、amazonもしくはRakutenブックスの紙書籍にてご覧になれます。

有料版電子書籍

↓ (<https://puboo.jp/book/136964>)

紙書籍(2025.7.7出版予定)

↓ (<https://www.amazon.co.jp/dp/4815044805/>)

タイトルか積直道(著者)で検索下さい。

この試し読みで約6000字、完全版は約25000字あります。

ウクライナ侵攻の激化をきっかけに、2023年に積直道が一念発起して書き上げた自伝です。

紙書籍はオンデマンド印刷のため、電子書籍と比べて価格が高くなっています。いずれも売上があれば積直道の願いの通りユニセフのウクライナの子供支援に寄付します。

また積直道の死因、高齢化社会における医療を問う最後の闘いについて、今後執筆を検討しております。発表する時は引き続きpapierにて行います。

(<https://puboo.jp/users/naonao>)

あるいは医師の小さな人生ではありますが、自衛のための闘いの物語が、手に取って下さった方々に少しでも伝わることを祈念して。

スタジオ53746

新 我が闘争 試し読み

著 者 积直道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
